

2005年10月18日

三井不動産株式会社代表取締役社長
岩沙 弘道 殿

DOCOMOMO Japan 代表
鈴木 博之

三井上高井戸運動場クラブハウス建物保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的のひとつとする国際的な非政府組織の日本支部です。われわれは上記土地の再開発そのものを全否定するものではありませんが、計画のなかで当該建物の存続が危ぶまれる旨の情報を得て、同建物の保存を要望いたします。

ご承知のように、三井上高井戸運動場クラブハウスは、約3万坪(99,000㎡)の広大な土地に建つ、鉄筋コンクリート造地上2階半地下1階建ての建物で、延床面積は1,036.54㎡、竣工は1936(昭和11)年でした。設計は久米権九郎(1895-1965)です。久米は、二重橋の設計で知られる土木技師・久米民之助(1861-1931)の次男として生まれ、学習院初等科・中等科を卒業し、シュトゥットガルト工科大学やロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーション・スクール・オブ・アーキテクチュアで学んだ建築家で、「耐震法に依る日本住宅の改良」でシュトゥットガルト工科大学から学位を得た(1929)ことに示されるように、デザインだけではなく工学にも秀で、日本近代を代表する建築家のひとりでした。三井上高井戸運動場クラブハウスは、彼が1932(昭和7)年に独立して事務所を開設して間もない時期に設計したもので、彼の戦前の作品のうちで数少ない現存例のひとつです。なお、その設計依頼は三井八郎右衛門高公(1895-1992)からといわれています。高公が権九郎の兄・民十郎と学習院の同期(権九郎はその2年後輩)だった関係で、小学校のころから親交がありました。久米が独立して事務所を構えた際に、高公は、城山荘(1935)など、三井関係の建物の設計を複数依頼しましたが、当該建物はそのひとつです。

この建物の歴史的・建築的価値は下記の2点に認められます。

1) 久米権九郎の初期の代表作であること

久米権九郎は、1924(大正13)年から1929(昭和4)年にかけてドイツやイギリスで建築を学んで帰国し、1929(昭和4)年に渡辺仁と設計事務所を構え、1932年に独立して久米建築事務所(現・株式会社久米設計)を開設しました。彼の初期のデザインは多様で、城山荘(1935)や、日光金谷ホテル(1935)、軽井沢万平ホテル(1936)のような木造の和風建築から、大倉邸(1936)のような、和風とモダンさを組みあわせたような作品が見られます。その中で、三井上高井戸運動場クラブハウスはもっともモダンで、彼がヨーロッパで学んだ最新の建築デザインを全面的に適用したものとして注目されます。この建物には付加装飾はなく、平らな白い壁面と四角い窓(横長窓は当時の新傾向です)、

テラス、半円形平面の階段室によるシンプルな構成で、ヨーロッパの同時代の最新の建築と比べても遜色ないものです。

この建物は、敷地の端に位置し、東から北に広がる運動場を見晴らせるように、1階、2階にテラス、そして屋上が設けられています。テラスに連続するかたちで1階に食堂、2階にクラブ室がありました。2階と屋上にも配膳室があって、クラブ室だけではなく、屋上でも軽食や飲み物が楽しめるように計画されています。更衣室を半地下に設けたことに関係して、玄関が半円形平面の階段の踊り場につながるのも、機能的かつ面白いアイデアです。いずれも、クラブ建築らしい、カジュアルで楽しい雰囲気をつくられています。それは1階と2階のテラスなどによって水平感を強調した外観、機能的にも視覚的にもアクセントになる半円筒形の階段室、そして建物の出隅すべてに丸みがつけられていることによっても表現されています。運動場に向かって開放的にし、後ろにサービス関連施設をとるのも合理的なプランニングです。テラスと連続する室内は、大きな開口部や、上階にいくほどセットバックする断面計画とあいまって、明るく開放的です。サッシュはアルミに変えられていますが、当初はスチール・サッシュで、プロポーションを意識してその割付けが決められていたのがうかがえます。細部にまで周到に配慮した設計であることは、たとえば煙突が、左右にほぼ対称の位置に、しかも外壁に一体化して組み込まれていることにもうかがえます。外観は、装飾のない、白い面の構成としてデザインされ、シンプルでありながら、品のいい、しゃれた建築にまとめられています。このような建築が実現したのは当時の三井財閥の高い見識によるものといえますが、それを見事に形に結晶させた、久米の建築家としての能力の高さも注目されます。この建物には、彼の、端正で伸びやかな感覚がよく現れています。

また、この建物で、構造とデザインを関連づけようとしている点も注目されます。たとえば、半円形の階段室の階段部分の斜めの床や踊り場をキャンティレバーで連続する無梁版とし、広い階段幅や緩めの勾配とあいまって、広がりを感じさせる、気持ちのいい空間にしたことや、1階のクラブ室とテラス境のカーテンウォール上部を、その内側の柱列の梁下端から連続する落天井（形式としてはボックス型の梁になる）とし、室内からテラスへの空間的つながりを損なわないようにしています。

2) 前の日本の近代建築の傑作として現存する貴重な例のひとつであること

この建物は、昭和初期の日本につくられたモダンな建築の中でも、東京逓信病院（山田守、1938、現存せず）、一連の東京市立小学校校舎（東京市土木局建築課、1931～1938、一部現存）、慶應義塾幼稚舎（谷口吉郎＋曾禰中條設計事務所、1938）、大阪中央郵便局（吉田鉄郎、1939）などと並んで、そのデザインが高く評価される例のひとつと考えられます。外階段が付加されたとはいえ、当初の姿もまだよく残されています。戦前のこの種の建物の現存例はかなり少なくなっており、当時の日本の最新の建築デザインを伝える例として貴重といえます。

以上のことから、当該建物は、文化的意義と歴史的価値を有する貴重な遺産と考えられます。日本近代を代表する、このかけがえのない建築遺産が後世に継承されますよう、現在進行中の再開発計画のなかで、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。もし求められれば、本会は、この建物の保存・活用に際して、建築の専門家という立場から助言をさせていただく所存であることを申し添えます。 敬具